保健師による被災者支援・ケアと「個別性」の位置

東北大学　板倉有紀

１　背景と目的　自然災害における支援・ケアの社会学的研究ではボランティアが着目された。「「人として」の支援」、「生の固有性」への志向という「個別性」への配慮が支援・ケアの活動をする人の重要な関心事であることが調査研究から考察されてきた。本報告では保健師という対人援助専門職がボランティアで行う被災者支援・ケア活動をとりあげる。個別性への配慮と、専門技術や知識・視点とがどのように関連し合い並行しているかを検討する。そうすることで、災害研究における職能ボランティアの社会学的考察の糸口とする。

２　対象と方法　もりおか復興支援センターが、被災後に岩手県大槌町から岩手県盛岡市へと移動した住民を対象に月１回行っている大槌町お茶っこ飲み会を事例とする。同会には過去２８年間にわたり大槌町で保健師として勤務した人物（Ｓ保健師）がボランティアとして参加する。報告者も体重測定・記録等の作業に参加させてもらい参与観察とインタビュー調査を行った。

３　結果と考察　（１）被災して盛岡に転居してきた人々というカテゴリーを通した健康ニーズ把握の継続：被災後の生活の変化の影響や健康ニーズが直接的に現れる血圧と体重が測定される。血圧や体重測定を通した健康状態の把握は通常の保健指導と同じである。その変化については被災の影響と関連づけた理解が、保健師・住民双方によってなされている。（２）個人の人生・生活史・「個別性」の位置１：お茶っこ飲み会の参加者の多くは大槌町の中でも地域的な結束の強いＡ地区の元住民である。東日本大震災が生じる以前から大槌町ではお茶っこの会が行われていた。盛岡市でのお茶っこ飲み会はその活動の連続線上にある。Ｓ保健師は、参加住民の一部については、被災前の生活状況や家族構成、被害状況を把握している。また同会では血圧の高さなどに代表される素人にも分かりやすい健康リスク指標への言及を入口として、住民の家族状況や被災生活の状況、健康状態を把握している。住民一人一人の置かれた状況という「個別性」への配慮は、健康ニーズへの支援・ケアに活用されている。（３）予防的観点からの支援・ケアという保健師の視点・「個別性」の位置２：Ｓ保健師による支援・ケアの活動を規定するのは、一人の個人同士としてというよりはむしろ保健師としてという職業である。ハイリスク者への対処や個別性を手掛かりにした保健指導は見られる。それらの活動を支えるものとして住民全体に対する予防的ケアを目的とするポピュレーション・アプローチの視点がある。Ｓ保健師のボランティアでの被災者支援・ケア活動は、第一には、個別性への志向というよりはむしろ、「被災して盛岡に転居してきた人々の集団」への支援、継続的な健康ニーズへのケアに保健師として志向したものである。この志向は、住民全体への物資の配布や住民間のつながりへの支援という住民全体への支援活動からも見てとれる。これらの複数の支援・ケアの場所としてお茶っこ飲み会がある。「個別性」への配慮はそうした活動の中で可能になる。保健師としてという職業アイデンティティを基盤としつつ保健師自らが行なっている活動としてこの事例は考察できる。

文献　似田貝香門編著、西山志保・三井さよ・清水亮・佐藤恵著 2008 年『自立支援の実践知――阪神・淡路大震災と共同・市民社会』東信堂